

ひるめしのもんだい

椎名 誠



ひるめしのもんだい

1992年7月20日 第1刷

著者 椎名 誠

発行者 新井 信

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 (〒102)

電話(03)3265-1211

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

*定価はカバーに表示してあります

© Makoto Shiina 1992

Printed in Japan
ISBN4-16-346650-9

ひるめしのもんだい 目次

息づまるとじょうすくいの宴だった 9

カツオブシだよ人生は 15

三人の怪しいおとつっあん対ウスバカ犬 21

夜風にマントがなびく頃 27

大阪たそがれ梅じんたん 33

マホービン走りなさい！ 40

ファクシミリにも花束を 46

怪異海苔偏愛者の告白 52

役人たちのマンガ 58

恐怖のおんなじおんなじ仮面 65

ダルマ堂の怪しい夜明け 71

ひるめしのもんだい 77

色紙エレジー 84

新幹線謎のネーブル美女 90

ヒコーキを待つ話 96

CTスキャンもいいものだ 102

おののき話 108

プロレス界にもデスマッチを 115

デモ行進の中で考えたこと 121

笑いパーティーの夜は更けて 128

全日本おしゃく問題 134

苦しい時には屋上がある 141

ヨクナイ風景 147

気分はすっかりチンギス・ハーン 154

生ビールが一番エライ! 160

炎天下に茨城県の実力をみた 166

四人の作家が集まって…… 173

サラバ バカ夏 179

ヨロコビの三点セット 185

けむりのように時はすぎて 191

どうしたらいいのだ……
197

秋の東欧監獄旅行
203

淋しいT O K Y O
209

ゴミ袋を覗く男
215

ニッポン滑稽嚴格格瑣末主義
221

話はビールで始まるが……
227

枝毛を切る女
233

秋の夜長に……
239

囲いの中の強権
245

あとがき
251

装画・挿画 沢野ひとし
装幀 南 伸坊

ひるめしのもんだい

息づまるどじょうすくいの宴だった



むかしぼくは十年選手のサラリーマンだった。サラリーマンも面白かったのだが、なんとなくモノのはずみでモノ書きになってしまった。

モノのはずみで弁護士やパイロットになるのは難しいが、モノ書きとかペテン師とか女のヒモなどには割合スバヤクなれそうである。とにかくはずみというのはおそろしいもので、ヨタ話やバカセコ話を書きつつモノ書きになったまま十年目を迎えてしまったのだ。

芸能生活十周年記念全国縦断感謝公演なんてのが行なわれたりするから、ぼくも十周年を迎えて感謝しつつ全国を縦断したくなった。全国を縦断して何をするか、というのが問題だが、「モノ書き生活十周年記念全国縦断感謝と味の旅」なんてのを一人でやってもむなしいだろかなあ。

こういう仕事が有難いのは会社にいかなくていいことである。サラリーマンをやめた時とにかく文句なく嬉しかったのはそのことだった。

それから十年、基本的に自由は続いているが、連日けっこうしぶとくからまってくる原稿の締切とか行動スケジュールなどによって時おりぐったりすることがある。

サラリーマンの頃は、こまかいことばかりチクチク突いて管理ばかりしたがるポマードテカテカの上役おやじに反発し、そういうことを「るせー」と思うところがなんとはなしの仕事の張りになったりしていたが、個人経営のモノ書きになると上司が誰もいないので、仕事が終わったあと同僚と上司や会社の悪口が言えないのがモノ足りなくて困った。

昨年の秋に、勤めていた会社のTという先輩社員が急死した。ぼくより六歳ほど上だったが、まあ同僚のようなものだった。営業担当のちょっと変った男で、極端に暗くて人づきあいが悪かった。けれどもいろいろ独創的なアイデアを持っていて、仕事は鋭かった。よく社長や上役と仕事上で衝突し、変り者扱いされていたが、社長や上司におべんちゃらをつかって飼いならされて他の先輩社員よりはずっと味のある男だと、ぼくは思っていた。

Tの訃報を聞いた時、すぐ頭に思い浮かんだのはその会社の宴会の席で、Tがいきなりとてもなく陰気な「どじょうすくい」をやった時のことだった。

そうなのだ。あの頃ぼくの勤めていた会社の宴会というのは、なぜかいつも殺伐としていた。

ひとつには男ばかりの会社だった、ということもあるような気がする。秋の社員旅行で温泉旅館などに泊っても、宴席を張るとずらっとドテラ姿のおとつあんやあんちゃんがスネ毛をむき出しにして、余興舞台を前にして「コの字型」に並んだ。並び方は上座から左右にきっちり「えらいもん順」であった。目で見える会社の最新序列というやつがそこに披露される。

経営幹部が型どおりの挨拶をして、あとはもう各自めいっぱいタダ酒を酔うまで飲んでいこう、という各馬一斉スタート型の酒宴がはじまっていくわけである。

そんな時、ぼくはいつも同じ旅館のどこか別の宴席からモレ流れてくる、ひとときわあかるくカン高い若い女の嬌声がうらやましかった。自分たちの宴席で聞こえてくるのは、早くも酔いはじめたおとつあんのダミ声やとっばい野郎のオナラぐらいのもので、やるせないのなんの。まったくおれはつくづく不幸な星の下に生まれてしまったものだ、と嘆きつつ杯を重ねていくのだった。

やがて余興ということになってくるわけだが、まだカラオケというものがそんなに普及していない頃だったので、みんな演歌や民謡の正しくあからさまな独唱競演であった。だから握ったマイクの小指をたてるナルシズムおとつあんもいなかったし、小声でぶわぶわビブラートをきかせる刈り上げ兄ちゃんなんてのもいなかった。それはそれでけっこう立派に正々堂々と美しい酒宴の時代でもあったのだ。

けれど宴席は基本的に殺伐としているものだから、間もなく酔って荒っぽく赤眼化したやつがそのへんの誰かにぎらぎらからみ、誰かがヘドを吐き、誰かがパンツを脱いだりした。

悪酔いしていなくても、眼の前でパンツを脱がれるとヘドを吐きたくなったけれど、まあそれはそれでいい時代の素朴でまじめなチンポコであったのだなあ、と今になるとしみじみ思う。先輩社員のTはそういう宴席にある日いきなり田子作の恰好をしてあらわれてきたのだ。豆しぼりの手拭で頬かぶりし、マヌケ顔の化粧をし、ふたつの鼻の穴にチリガミを突っこんで、小腰をかがめてあらわれた。

いくらか盛り上ってきていた宴席は、まったくもって異例に異常に凝ったいでたちであらわれたTを見て低く重くぎわめき、やがて無惨にも「しん」と静まってしまった。

それはそうなのだ。普段殆ど黙りこくってあまり笑顔もみせないようなTが、いきなり鼻の穴にチリガミをさし込んであらわれてきたのだから、宴席の連中は笑うよりも「何事がおきたのか！」と息を吞む反応の方が先だったのである。

今思うに、Tはたぶんその頃どこかそのテの場所に出入りして「宴会芸」のようなものをひそかに習ったのであろう。TはTの秘策をもって、その初舞台で一氣に逆転技の勝負をかけようとしたのだ。

宴席の人々もやがてなんとなくそんなTの目論見を理解していったようで、間もなくTのひ



こっまい

ギンナニだ
ギンナニだ



これからオレのこと
ニワトリって
呼んでくれよ

なな

……

イイタさんの頭
トンガツッて
いるよ



クボタくんですぬ
わたしの豆で

とめかく
いっていの



どく堅苦しい、面白くもなんともないどじょうすくいに、運動部付の応援団のような、ひどく武骨でやっぱり堅苦しい手拍子を、みんなしてばちんばちんとはたいてやったのだった。

Tの訃報を聞いたとき、ぼくはその時のTの必死の田子作面を思い浮かべ、やっぱりあの頃は、サラリーマンにとって、まだどこかしら心やさしい時代であったのかもしれないなあ、と静かに思ったのである。

一九七九年の忘年会までぼくはサラリーマンだった。その年、津軽海峡冬景色が流行^{はや}っていた。ぼくの送別会も兼ねられていたその席で、ぼくは「サーヨナラあなたあ……」というその年のはやり歌をうたってみんなに気持悪がられた。思えばその忘年会がぼくの最後の、会社宴会^{かいしゃうたひ}であった。